

論文

ウィーンのカフェと文学

— イルゼ・アイヒンガーの場合 —

真道 杉^{※1}Vienna Café and Literature
— In Case of Ilse Aichinger —Sugi SHINDO^{※1}

ABSTRACT

The history of the Viennese Coffee House (Wiener Kaffeehaus) can be traced back into the second half of the 17th century. At the end of the 19th century it had reached its zenith as the most significant scene, i.e. locality, of Viennese culture, where artists, authors but also politicians used to congregate. For example, the critic Karl Kraus, who has composed a typical piece of Viennese satirical text called “Die demolierte Literatur” concerning the dismantling of the most important literature coffee house of those days, the Café Griensteidl, was a regular guest there himself. While, on the one hand, he writes satire about the Viennese coffee houses he has, on the other hand, substantially contributed to the publishing of texts of the most renowned coffee house author: Peter Altenberg.

The literature of the Viennese coffee houses was predominantly upheld by Jewish writers.

Texts by Ilse Aichinger, which were written as a serial column for newspapers between the years 2000 and 2005, originated for the most part in coffee houses. Particularly the last twenty texts, later published as a book under the title “Subtexte”, were written without exception in the coffee house “Jelinek”. The author thus continued the tradition of the literature of the Viennese coffee houses which may simultaneously be interpreted as the adoption of a lost Jewish literary practice.

はじめに

ウィーンのカフェ文化

ウィーンの文化を語る上で必ず出てくるもののひとつに、2011年にユネスコ無形文化遺産に登録されたウィーンのカフェがある。その始まりは、ウィーンの長い歴史が様々な伝説や言い伝えによって彩られているように、いくつかの説として言い伝えられている。おそらく最もよく知られている説は、1683年のトルコ軍によるウィーン包囲（第2次ウィーン包囲）で皇帝レオポルト1世軍がオスマン軍を打ち破りオスマン軍が敗走した際に、その陣営に残った戦利品の中にあつた大量のコーヒーをその起源とするものである。

トルコ戦でスパイとして活躍したと言われるゲオルグ・フランツ・コルシツキーがそのコーヒーをもらい受け、最初のカフェを開いたとされるが、当時のウィーン子たちが街の危機から解放された喜びと、トルコの文化を「飲み下した」という自分たちの優勢を誇る気持ちが言い伝えとなつて残ったのであろう¹。伝説はともかく、17世紀後半あたりから徐々に増えていった²ウィーンのカフェは19世紀後半になると一つの重要な文化拠点となる。ウィーン文学を論じたりヒャルト・ミクレーンの『ウィーン』³はウィーンを中心にあるヘレン通りについて言及して、「19世紀末から第二次世界大戦まで

※1 日本大学国際関係学部国際教養学科 准教授 Associate Professor, Department of International Liberal Arts, College of International Relations, Nihon University

の間に文学において名を残した者は全て、一つ或いは三つのコーヒー・ハウス、つまり、グリーンシュタイドル、ツェントラール、ヘレンホーフに通っていた。そしてほとんどの作家が自分の行きつけのカフェについて書くか、ウィーンのコーヒー・ハウス一般について哲学することを避けることはできなかった。」⁴と、19世紀末のウィーン文学とカフェの緊密な関係を描写している。

ミクリーの言及は文学の場としてのカフェに注目したものであるが、当時のウィーンのカフェはそれだけにとどまる存在ではなかった。徒歩数分の範囲にあった3つの文学カフェはウィーンのカフェ文化を示す一例である。例えばブルク劇場のすぐそばにあるラントマンは政治家と役者の溜まり場であった。建築家アドルフ・ロースが設計したカフェ・ムゼウムには当時を代表する画家のクリムトや建築家のホフマンなどの芸術家が集まった。19世紀末から20世紀初頭のウィーンでは、カフェに集まる客の職業がそのカフェの個性を作り出していった。大理石の天板を用いたテーブルを典型とする瀟洒な内装を施した店内では、コーヒー1杯で何時間でも新聞や雑誌を読んだり、議論をしたり、ものを書いたり、チェスやビリヤードをして過ごすことができる。政治家、音楽家、演劇人、建築家、芸術家、文学者、思想家が集まった。19世紀末に大きく花開いたウィーンの文化はそれらのカフェから生まれたと言っても過言ではない。

現在、ウィーンにも格安珈琲店が進出し、伝統的なカフェの存続を危ぶむ声も聞かれるが、本論では、そのカフェの文化が21世紀に於いてもウィーン文学になお影響を与え続けていることを、ウィーンで生まれ戦後60年にわたって執筆活動を続けたイルゼ・アイヒンガー（1921-）の文学を通して示してみたい。アイヒンガーの作品については、これまでも、その作品の背景となる場所や歴史的背景に触れたものは数多くあるが、カフェに焦点を当てて論じたものはない。そこで、今回はウィーンのカフェ文学を概観し、その上で、そのカフェ文化がアイヒンガー作品に直接的に影響を与えた具体例を後期の作品から選び、アイヒンガーが現代においてカフェ文学という形式を踏襲してテキストを書いた意味を考察してみたい。

1、ウィーンのカフェ文学

前述のミクリーはウィーンのカフェ文学とその文士たちについて、20世紀前半に活躍したウィーン

の文筆家であったアントン・クー⁵を引いてその特徴を端的に表している。

アントン・クーは次のように見事に言い当てている。「カフェ文士とは何者か？ほかの人が外で経験することのできないことをコーヒー・ハウスで考える時間のある人間のことである。」カール・クラウス⁶のグリーンシュタイドル風刺とペーター・アルテンベルク⁷の印象主義的な文章からアルフレッド・ポルガー⁸の『カフェ・ツェントラールの理論』やフリードリヒ・トアベルク⁹の『ヨレッシュおばさん』まで、これらはみな文学カフェの雰囲気を取り取りうとする試みである¹⁰。

外界とは遮断されたカフェという小宇宙の中で生み出されるこのような文学は、ウィーン独自のカフェ文学として独自のジャンルを確立するまでに至る。

池内紀は日本にその文学を紹介するにあたり、そのカフェ文学の代表格とも言えるペーター・アルテンベルクについて『ウィーン世紀末文学選』¹¹のあとがきに次のように記している。

気が向くと夜更けのカフェで、あり合わせの紙切れに、その日、目にしたところを書きとめた。カフェの奥でひそひそ話をしていた男女の会話や、公園のベンチで見かけた良家の子女のおしゃべり。あるいは客待ち中の娼婦のちょっとした仕ぐさである。おおかたがウィーンの往来や室内で見かける何気ないシーンだった。カール・クラウスがそんなペーターの紙切れを集めて、一八九六年、ドイツの出版社に持ち込んだ。宿なしの風来坊が三十七歳にして本を出した¹²。

ペーター・アルテンベルクはカフェを書斎とした典型的なカフェ文士である。カフェで文筆活動をしているという外的条件から、アルテンベルクの作品には長編小説のような複雑な筋が描かれるようなものはない。日々、カフェや街中で見かける人々の他愛ない会話を切り取った短文を集めると、それが印象派の点描画のように当時のウィーンの様子を生き生きと表している、そんな文学である。そのような文章が書かれるのは、まともな原稿用の紙ではなく、アイディアが浮かんだときにその辺にある紙切れである。アルテンベルクはその文章とその執筆スタイルの両面においてカフェ文化を象徴している。

そのアルテンベルクを作家として世に出したカー

ル・クラウド自身は、カフェ・グリーンシュタイドルが目の前のミハエラ広場の改築工事に伴い解体される際に、ミクリーンの引用に出てきた「文学の取り壊し」¹³を書いている。批判的な文章で知られるクラウドらしく、この「文学の取り壊し」はグリーンシュタイドルを中心としたカフェ文化を風刺して書いたものとして有名である。クラウドはカフェ文学を風刺しつつも鋭い観察眼でカフェの様子を伝えている。カフェでは、熟練の給仕たちが気難しい作家たちを親切な対応で迎え入れてくれ、コーヒーよりも新聞が欲しい客にはそれに応える。カフェには辞書もあり、突然アイデアがひらめいた作家にはすぐに筆記用具も用意される。給仕たちは、作家たちの良き理解者であり、仕事に欠かせない存在であったようだ¹⁴。クラウドの文章は風刺を交えながらも、当時の作家にとってのカフェの存在の大きさを伝えている。「文学の取り壊し」はウィーンのカフェそのものを論じたもので、アルテンベルクの掌文を特徴とするカフェ文学とはまた違ったカフェ文学の一つの典型である。クラウドがアルテンベルクを書いた紙切れを本にしたという事実も考え合わせると、クラウドは一方でカフェ文学を風刺しながらもその立役者のひとりであるという二律背反を生きていたということになる。グリーンシュタイドルの取り壊しのあと、文学の拠点はその近くのカフェ・ツェントラルに移る。今日でもペーター・アルテンベルクは張りぼて人形としてカフェ・ツェントラルに日々座り続けている。

ウィーンのカフェ文化の側面としてもうひとつ重要な点は、ウィーンのカフェ文学が主にユダヤ人、そしてユダヤ系の作家たちによって担われていたという事実である。先に出てきた、クラウド、アルテンベルクもトーアベルクもユダヤ人であり、ポルガーは改宗ユダヤ人の息子である。カフェ文学の主な担い手として知られる「若きウィーン」のメンバー、アルトゥール・シュニッツラー¹⁵、フーゴ・フォン・ホーフマンスタール¹⁶、リヒャルト・ベア＝ホフマン¹⁷、ヘルマン・バル¹⁸も同じくユダヤ人である。シオニズム運動の指導者であったテオドール・ヘルツル¹⁹は、『ユダヤ人国家』をカフェで書いた。そのヘルツルとの出会いを『昨日の世界』で書いたシュテファン・ツヴァイク²⁰もユダヤ人である。ウィーンのカフェ文化は1938年のナチス・ドイツによるオーストリア併合を以ってその終焉を迎えたとされるが、その理由は、その担い手たちがオーストリア併合と

ともに亡命を余儀なくされ、ウィーンを去っていったからである。戦後ウィーンの有名カフェは現在に至るまで営業を続けており、観光名所にもなっているが、昔日のカフェ文学が本当の意味で戻ることはなかった。

本論で論じるイルゼ・アイヒンガーは、そのようなカフェ文化の街ウィーンで1921年に生を受け、そして21世紀に入ってもカフェで執筆活動をした作家である。100年以上の時を隔てアイヒンガーがカフェで書いた文学とは現代にどのような意味を持つのだろうか。

2、アイヒンガーとウィーンとカフェ

1921年に双子の妹ヘルガとともにウィーンで生まれたイルゼ・アイヒンガーはウィーンで育ち、第二次世界大戦もウィーンで戦火をくぐり抜けた。2015年7月に日本大学国際関係学部で上映された、クリスティーネ・ナーゲル監督作品『私の住む場所』²¹においても、ウィーンの街の場面が多く用いられているが、ウィーンというトポグラフィーはアイヒンガー文学において特別な意味を持つ。

イルゼ・アイヒンガーはナチスのニュルンベルク法による分類で、半ユダヤ人の「混血」のオーストリア人として、(改宗)ユダヤ人²²でオーストリア人の母親とともにナチス支配下ウィーンのゲシュタポ本部すぐそばの住居で第二次世界大戦を生き延び、戦後1947年にその体験をいち早く長編小説にしたことで、注目を浴びた作家である。彼女はその後60年にわたって執筆活動を続け、現在もまだウィーンに存命の作家である。60年の作家活動を概観してみると、最初の『より大きな希望』はナチスの戦争犯罪のショックから立ち直れないドイツ語圏において、彗星のように現れた質の高い作家として評価されたと同時に、戦争犯罪の加害者という立場に立たされたドイツ人にとっては非常に気まずい作家として受けとめられた。被害者側からは簡単に戦争体験を書くことができる、という批判を『より大きな希望』は受けた²³。50年代以降、アイヒンガーはその批判をかわすかのように、その作風を寓話的なものへと転換し、作品は難解なものとなっていった。そして80年代には、評価は高いがその難解さゆえに読まれない作家というイメージが出来上がっていた。50年代にはまた、白バラ運動で知られるソフィー・ショルの姉であるインゲ・ショルとともに芸術学校を立

ち上げる活動を行い、また作家ギュンター・アイヒとの結婚後ドイツとオーストリアの国境近くのグロース・グマインに移り住む。1972年にアイヒが亡くなった後、二人の子供たちが大きくなると、その子供たちの拠点であるフランクフルトにしばらく住んでいたが、1988年に生まれ故郷であるウィーンに戻ってくる²⁴。そして、その移住をきっかけに、40年の時を隔てて、再び幼少期のウィーンでの思い出を、特にユダヤ人の親族を中心に書くようになる²⁵。

1980年代から90年代にかけて、アイヒンガーはほとんど新しい作品は発表せず、1991年の作品集は90年代ではすでに全集として認識されていた。しかし、その後9年経った2000年、80歳を迎えようとしていたアイヒンガーは、編集者であり、生活のパートナーでもあった、リヒャルト・ライヒェンスペルガーの強い勧めで日刊紙*Der Standard*に「ビエンナーレ日記」(*Viennale-Tagebuch*) シリーズを掲載した。新聞連載はその後「消滅のジャーナル」(*Journal des Verschwindens*)そして「信じがたい旅行」(*Unglaubliche Reisen*)、「影絵芝居」(*Schattenspiele*)と続いてゆく²⁶。「ビエンナーレ日記」と「消滅のジャーナル」は2001年に『映画と災厄』(*Film und Verhängnis*)²⁷として、「信じがたい旅行」と*Der Standard*に掲載された「影絵芝居」は2005年に『信じがたい旅行』(*Unglaubliche Reisen*)として、そして、*Die Presse*に掲載された「影絵芝居」は2006年に『サブテキスト』(*Subtexte*)として単行本になった。80歳を超えて、およそ5年の間に3冊の単行本を出版したアイヒンガーの復活は研究者、読者から驚嘆をもって迎えられた。この後期3冊の作品は、アイヒンガーが新境地を開いた作品として評価されている。

その後期作品の特徴は、主に1920年代後半から1940年代の第二次世界大戦期の思い出を扱っている点である。テーマは主に、死、病気、ホロコースト、運命を扱っており、アイヒンガーが日常目にするものからの連想が自身の思い出へと繋がってゆく構造が共通している。

後期の最初の作品群である、「ビエンナーレ日記」では、テキストは映画館と映画を契機として展開されてゆくが、「消滅のジャーナル」、「信じがたい旅行」になると、それがカフェへと移行してゆく。アイヒンガーの作品と場所の関係を分析したシモーネ・フェスラーによると、「それ自体がテーマや論理化されているわけではないが、街の中の起点がカフェになる。ブロイナーホーフ、シュペアル、コルプ、グリーンシュタイドル、オイロペ、トラクスルマイヤー、そ

して、特にヘレン通りにある自宅のそばのコールマルクトにあるデーメル²⁸」。つまり、カフェが彼女の文章の発想の契機となってゆくと、フェスラーは指摘する²⁹。実際に作品を読むと、カフェの名前やカフェに座るアイヒンガーの周囲にあるものが作品に頻繁に描かれており、アイヒンガーがカフェという場を作品の出発点としていたことがわかる。

後期3冊に共通するもう一つの特徴は、新聞社から依頼されたコラムであったことである。コラムという形式上、文章の長さに制約があり、また、締め切りという時間的制約がある中で成立した文章であった。新聞等にかかれる文章のジャンルにフェュトンがあるが、このフェュトン (*Feuilleton*) はもともと新聞の文化欄を指す。ウィーンではカフェ文学と結びつき「ウィーンのフェュトン」という独自のジャンルを確立した。その軽妙さゆえに軽薄な文学としてしばしば批判の対象ともなった。アイヒンガーは新聞のコラムを引き受けたことで、おそらく「ウィーンのフェュトン」の伝統を強く意識したにちがいない。その流れから、あえて仕事をカフェに移したとも考えられる。実際、『サブテキスト』に掲載されたテキストは全てカフェで執筆されていたことがフランツ・ハンマーバッハーの論文³⁰で明らかにされている。ハンマーバッハーによると、

この20編のテキストは例外なくカフェ・イエリネックで10時から13時の間に書かれた。いつもその日の「クロネン新聞」と何冊かのE.M.シオランの単行本が置かれていた³¹。

ハンマーバッハーのこの記述は、クラウドが描写した100年以上も前のカフェ・グリーンシュタイドルやアルテンベルクの執筆ぶりを彷彿とさせる。自分のアイディアを助ける新聞や辞書の代わりに、アイヒンガーは思想家シオランの単行本を持ち込み、世紀末の文士と同じ環境を意識的に作り出し、執筆活動をしていたことがこの記述から読み取れる。

3、アイヒンガーのカフェ文学

『信じがたい旅行』³²は、前述のハンマーバッハーとフェスラーが共同編集をしているが、彼らは、マールバッハにあるドイツ文学文書館 (DLA) に保管されているアイヒンガーの手書原稿等の一次資料を調査し、その直筆原稿を挿絵のように掲載している。この草稿を見ると、アイヒンガーの後期作品がまさ

にカフェ文学としての特徴を備えていることがわかる。

例えば、インペリアルホテルの便箋に書かれた草稿³³や、買い物の紙袋を破ったものに書かれた「クリスマスの別れ」の完全原稿³⁴。カフェ・デーメルメニュー³⁵にはアイヒンガーのテキストの幾度かにわたって言及されているウィストン・チャーチルの有名な最期の言葉、「すべては退屈だった」とメモ書きがある。そのメニューは「台風の日 カフェ・デーメル」というタイトルのテキストの脇に掲載されている。これらの直筆原稿が書かれた紙は、まさにペーター・アルテンベルクの執筆にもつながるスタイルをアイヒンガーがこの頃意識的に行っていることの証拠である。それまで自宅の書斎で、形式が統一されている小さな紙切れにアイディアを書き留め、そのメモ書きを部屋中に置きながら仕事をしていたスタイル³⁶とは明らかに異なっている。マールバッハには、おそらくカフェに行く前に買ったと思われる小学生用のノートが幾冊も保管されているが、そのノートには、最初の数ページだけに書き込みがあるもの³⁷が多い。そのほか、封筒に書いた原稿、アイヒンガーが書き込んだクロスワードパズルなど、この時期のアイヒンガーの執筆スタイルを表す資料が多く保管されているが、それらの資料を見ると、アイヒンガーの執筆スタイルは、まさにカフェ文学の特徴を示している。

その中で今回は、すべての作品がカフェ・イエリネックで書かれている『サブテキスト』³⁸に掲載されているテキストを取り上げたい。

これらのテキストを考察するには、*Die Presse*からコラムを依頼された際のもうひとつの要素を考慮しなくてはならない。このコラムは、アウシュビッツ強制収容所解放60年をテーマにしたエッセーとして新聞社から依頼されたものである。*Der Standard*と同じ「影絵芝居」というタイトルを受け継ぎながら、内容的にはアウシュビッツという依頼テーマにより、死やホロコーストというテーマが一層顕著に浮かび上がってきている。

テーマが死や病気などを扱った暗く重いものであるにもかかわらず、そのテキストは天衣無縫な軽やかさを感じさせる。

以下『サブテキスト』の中から、「1、」で見えてきたようなカフェ文学の特徴をよく表している箇所と、『サブテキスト』の中でアウシュビッツが扱われている箇所を取り上げて、アイヒンガーが本作品におい

てカフェ文学の形式を踏襲している意味を考えてみたい。

まずひとつめのテキストは、『グンペンドルフのディオスクロイ』³⁹の最後の箇所である。グンペンドルフはウィーンの6区の中にある地区の名前で、カフェ・イエリネックはその区にある。ディオスクロイはギリシア神話の双子の神で星座のふたご座のことでもある。不死身のポロックスと死者の国であるハデスにいるカストルは一緒にいるために、二人とも半神となり一日交代でオリュポスとハデスを行き来するようになった話にかけて、アイヒンガーはカフェ・イエリネックにいつも交代で出ている二人の給仕、「サブテキストのある」給仕と「サブテキストのない」給仕のことを書いている。

「サルツブルクのモーツァルト週間」で「ツァイデ」が上演される。シオランはモーツァルトとバッハをある程度の絶望の薬として勧めている。しかし、全くサブテキストそのものの今日の給仕にはそんな治療も必要ない。彼はそつなく、もう一人のウェ이터と比べスマートでうるさくなりすぎることもないが、しかし二人の給仕にはそれほどの違いもない。二人の対極は崩れつつある。スウェーデン広場の劇場では20時に「モーゲルパッキング」が上演。「自分を安売りしないでください。」とモーツァルトの星座の星占い。そしてその星座は、もう長いことサルツブルクの墓地に眠っているクレメンスの星座でもある。「変化に抗っていると、改善は見込まれません。」

どこからウィーンに帰ってくるのが好きかという質問の答えを考えようとしても、カフェ・イエリネックのおしゃべりがうるさくなってきているので、今は頭が回らない。「こんにちは、いらしていただけて光栄でございます、御機嫌よう、良い日曜日を、奥様お手にキスを、御機嫌よう、御機嫌よう。」時おり、別のカフェに行こうかと考えるが、しかし、ここに満ちているサブテキストと驚くほどのサブテキストのなさの蓄積を考えるだけでも他のカフェはとてまかなわない。ここでだけ、サブテキストのなさとそのあらゆる陰影がどこへそしてどこまで伸びているのかを見つけることができるのである⁴⁰。

『サブテキスト』というタイトルそのものが示す通り、作品は、テキストの表面に出てくる縦横無尽とも呼べる連想のつながりの中から、その裏に隠れたメタテキストが浮かび上がってくる構造になっている。テキストに書かれた連想の鎖は、新聞に載って

いる「サルツブルクのモーツァルト週間」の記事から、アイヒンガーが常にカフェに持ち込んでいるシオランの本へ、そして、モーツァルトを鬱の処方箋とする引用を経て、カフェの砂糖袋が新聞に書かれたと思われる星座占いへとつながり、さらには、モーツァルトと1998年に他界した息子のクレメンス・アイヒを結びつける。若くして亡くなった両者は同じ星座の元に生まれただけでなく、クレメンスはモーツァルトの生誕地サルツブルクの墓地に眠っており、両者は生誕と終焉の地を共有しているが、モーツァルトの生誕地については本文には記述がない。そこにはその情報を知っている者のみにわかるつながり、つまりサブテキストが隠されている。カフェ・イエリネックに交代で出ている給仕のように、そこにいない給仕が、そして書かれていないテキストが、書かれているテキストにサブテキスト、つまり隠れたテキストとして陰影を与え、『サブテキスト』という作品を完成させる。その構造をディオスクーロイ及び二人の給仕は象徴的に示唆している。アイヒンガーはこのような暗号ともいえるヒントを作品の中に織り込み、それに気づいた読者を隠れたサブテキストへと誘うのである。「陰影がどこへそしてどこまで伸びているのか」は、そのヒントを見つけ出した読者のみに開かれるテキスト世界である。

「存在の景観と天気」⁴¹にはアウシュビッツとアイヒンガーの一族との数奇な関係と運命が書かれている。アイヒンガーの曾祖父は「北鉄道」⁴²のアウシュビッツ駅の駅長であった。無論アウシュビッツ強制収容所ができるずっと前のことであり、彼はその鉄道建設にも携わっていた。「彼はアウシュビッツのうちにどうなったか生きて知ることにはなかった。彼はすでに十分懐疑的であった。」⁴³彼の懐疑が直接ナチスに向けられていたわけではないのは明らかであるが、彼のその懐疑は的中して、彼の娘であるアイヒンガーの祖母とその子供のうち二人はナチスによって「家畜用のトラックに乗せられ」⁴⁴強制収容所に送られ、どこで亡くなったかも正確なことはわからない。アイヒンガーたちは鉄道に面した祖母の家で「北鉄道関係者のお茶会」で「鉄道が通ると、半分開いた窓のガラスが音をたてる」⁴⁵音をきく。その鉄道の行き着く先は一族の由来の場所であり同時に消滅の場所でもある。サルツブルクがモーツァルトとクレメンスの生誕と墓場の街であると同様に、アウシュビッツは一族のルーツであり、殺戮された場である。そのアウシュビッツを、テキストの別の箇所はさら

に別の次元へと導く。

「メランコリーのない世界ではナイチンゲールもげっぶをし始める。」とE.M.シオランは言う。最近ではアウシュビッツでもナイチンゲールが生存できるようだ。グラツェナは毎週月曜日にうちにきて掃除をするが、連休になると故郷へ帰る。他のどこよりも草が青く、空がはっきりと明るく、他のどこよりも木が大きく繁っているのだと、「アウシュ、ええと、わたしの故郷のことです」。一度だけ彼女が言ったことがある。「アウシュビッツはきれえなところですよ、アイヒンガーさん。」⁴⁶

「きれえ」(scheen)⁴⁷というこの家政婦の言葉のあまりにも日常的な軽やかさは、その歴史を知っている者を当惑させる効果を持っている。しかしまた、家政婦の言葉をそのまま切り取った「きれえ」(scheen)という響きは、その口語的な現実感で、彼女の故郷アウシュビッツの美しさをも現実のものとして伝えている。アウシュビッツ解放記念の年に書かれたこのコラムの中でも、この箇所は特にアウシュビッツという地名がおもむろに日常会話の中に出てくる点で特にインパクトの強い箇所であるが、歴史の重さをこの家政婦の言葉の軽やかさと対比させるのも「サブテキスト」の技法であるといえる。大きな負の歴史を背負いながらも、アウシュビッツの土地に暮らす人々には現実の生活があり、そこには確固とした彼らの郷土愛もあるという事実。強制収容所のあった地には、時間の経過の象徴でもある青々とした草が過去を覆うようにどこよりも鮮やかに繁っている。家政婦の何気ない一言に、サブテキストとしてのアウシュビッツの凄惨な過去と、読者が思いもしない現在の美しいアウシュビッツの光景が同時に鮮やかに浮かんでくる。生き続けてゆくことの残酷さそしてその事実を醒めた目で見、軽妙な語り口で書くアイヒンガーの新境地がここにある。それを可能にしたのが、カフェ文学独特のスタイルであったとみることができる。

まとめ

カフェ文学に典型的に見られる身近なモチーフから派生する連想と『サブテキスト』というタイトルが示す通りのテキストの重層構造により、後期アイヒンガー文学は独自のスタイルを確立し、1世紀前のカフェ文化をさらに進化させた。その進化の中にアイヒンガーは独自の作品構造を作り上げ、新境地

を開いた。テキスト例で見てきたように、重層構造の中にモーツァルトとクレメンスのような人物、あるいはアウシュビッツという場所の過去と現在をつなぎ合わせ、お互いに陰影とする構造を提示することにより、現実の表面だけでなくその裏を見せる独自の文学世界がそこにはある。

アイヒンガーの後期のカフェでの執筆活動そのものの「サブテキスト」を読み取ろうとするならば、それは、まさに『サブテキスト』の当初の依頼であった「アウシュビッツ解放60年」への彼女の一つの答えであろう。1938年にナチスによるオーストリア併合でウィーンを追われて散り散りとなったユダヤ人文士たち、そして、消滅したウィーンカフェ文化、すなわちユダヤ人文化を21世紀に自らの執筆活動そのものを通じて、その文化の継承宣言としてこのテキストを位置付けるとき、ヨーロッパにおけるユダヤ文化の新たな復活の一端が見えてくる。今後、本テキストを、ヨーロッパを中心に現在進行している、ユダヤ人迫害の記憶を留めようとする文化活動やユダヤ文化の継承という動きと合わせて考察すると、さらに新たな発見が出てくるであろう。

¹ 鈴木隆雄（編）『オーストリア文学小百科』（水声社 2004年）には、その始まりは1683年のトルコ軍による第二次ウィーン包囲の時期にアルメニア人ヨハネス・ウィオダートであるとの説が記載されている。S.124。

² 良知力『あおきドナウの乱痴気』（1985）第2章 コーヒー・ハウスとウィーン気質（S.25-）によると、17世紀中盤にすでにウィーン市の内外合わせて100件近くのコーヒー・ハウスが存在していた。

³ Miklin, Richard: *Wien. Literarische Spaziergänge durch Vergangenheit und Gegenwart*. (Stuttgart, 2000) 参照。

⁴ *Ibid.*, S.91訳は執筆者による。

⁵ Anton Kuh (1890 ウィーン生れ - 1941 ニューヨーク没) プラハのユダヤ系出身。ジャーナリスト、エッセイスト。(鈴木 (2004), S.145)

⁶ Karl Kraus (1874 ボヘミア生れ - 1936 ウィーン没) ボヘミアのユダヤ人家庭に生まれる。批評家、劇作家、詩人。(鈴木 (2004), S.152)

⁷ Peter Altenberg (1859 ウィーン生れ - 1919ウィーン没) ユダヤ系。詩人。(鈴木 (2004), S.37)

⁸ Alfred Polger (1873 ウィーン生れ - 1955 チューリッヒ没) フェユトニスト、劇作家、小説家。(鈴木 (2004), S.466.)

⁹ Friedrich Torberg (1908 ウィーン生れ - 1979年ウィーン没) 小説家、編集者、批評家、翻訳家、叙情詩人。ユダヤ人。(鈴木 (2004), S.300f.)

¹⁰ Miklin (2000), S.91.

¹¹ 池内紀（編訳）『ウィーン世紀末文学選』（岩波文庫 1989年）

¹² *Ibid.*, S.355.

¹³ Kraus, Karl: „Die demolierte Literatur.“ (in: *Wiener Rundschau*, Wien [Jg. 1], Nr. 1 v. 15. November 1896, S. 19–27 [I], Nr. 2 v. 1. Dezember 1896, S. 68–72 [II], Nr. 3 v. 15. Dezember 1896, S. 113 bis 118 [III], Nr. 4 v. 1. Januar 1897, S. 153–157 [IV].)

¹⁴ *Ibid.*, S.19.

¹⁵ Arthur Schnitzler (1862 ウィーン生れ - 1931 ウィーン没) ユダヤ人の劇作家、小説家。(鈴木 (2004) S.235f.)

¹⁶ Hugo von Hofmannsthal (1874 ウィーン生れ - 1929 ロダウン没) 小説家、編集者。(鈴木 (2004), S.460f.)

¹⁷ Richard Beer-Hofmann (1866 ウィーン生れ - 1945 ニューヨーク没) ユダヤ系小説家、劇作家。(鈴木 (2004), S.432ff.)

¹⁸ Hermann Bahr (1863 リンツ生れ - 1934 ミュンヘン没) 批評家、劇作家、小説家、エッセイスト。(鈴木 (2004), S.2350f.)

¹⁹ Theodor Herzl (1860 ブダペスト生れ - 1904 エドラッハ没) 劇作家、ジャーナリスト、シオニスト。(鈴木 (2004), S.445)

²⁰ Stefan Zweig (1881 ウィーン生れ - 1942 ベトロポリス (ブラジル) 没) 作家。ユダヤ人。(鈴木 (2004), S.287ff.)

²¹ Nagel Christine, *Wo ich wohne. Ein Film für Ilse Aichinger* (Kurt Mayer Film, 2014) アイヒンガーの作品及び映像を用いた文学ドキュメンタリー映画。

²² 当時、ウィーンに住む多くのユダヤ教徒がキリスト教徒に改宗していた。しかし、ナチスのニュルンベルク法ではその改宗ユダヤ人も「ユダヤ人」として扱った。

²³ この点に関しては、例えばChristine Ivanovicが戦後のドイツ文学においてアイヒンガーが黙視されてしまった背景を論じている。山本浩司（編）『災厄の想起と言語化 イルゼ・アイヒンガーと戦後文学のカノン』（日本独文学会 2009), S.47-75参照。

²⁴ Mooser, Samel (Hrg.): *Ilse Aichinger. Leben und Werk*. (Frankfurt a.M., 1995), S.341 f. 参照。

²⁵ 幼年期を扱った作品の中でもよく言及されるものとして Kleist, Moos, Fasane があるが、この作品自

体は1959年に書かれ雑誌*Akzente*に発表されている。専門家などに注目されるようになったのは、1987年に単行本として発表された以降である。Aichinger, Ilse: *Kleist, Moos, Fasane* (Frankfurt a.M., 1991), S.11-17及びS.119参照。

²⁶ *Viennale-Tagebuch*は2回にわたって2000年10月16日から25日、2001年10月22日から31日までのそれぞれ毎日掲載。*Journal des Verschwindens*は2000年11月3日から2011年10月19日までの毎週金曜日連載。続いて*Unglaubliche Reisen*が2001年11月30日から2003年8月8日まで連載。*Schattenspiele*は2003年11月14日から2004年10月8日まで同様に連載。以上は全てオーストリアの日刊紙*Der Standard*に掲載された。その後、2004年にオーストリア人作家エルフリーデ・イエリネックのノーベル文学賞受賞に対して批判的な文章を掲載しようとしたところ、イエリネックとの関係を重視した*Der Standard*が書き換えを要求し、それを拒否したアイヒンガーは*Der Standard*との掲載をやめてしまう。当該の文章は*Neue Zürcher Zeitung*に掲載される。その同タイトルで*Die Presse*に2004年12月24日から2005年6月28日まで連載を続けた。

²⁷ Aichinger, Ilse: *Film und Verhängnis* (Frankfurt a.M. 2001)

²⁸ ここに挙げられているカフェ以外に、アイヒンガーの写真集のカメラマンであるシュテファン・モーゼスは1995年にアイヒンガーがカフェ・インペリアルで仕事をしている写真も複数撮影している。Moses, Stefan: *Ilse Aichinger. ein Bilderbuch*. (Frankfurt a.M., 2006) 参照。

²⁹ Fässler, Simone: *Von Wien her; auf Wien hin. Ilse Aichingers "Geographie der eigenen Existenz"*. (Wien-Köln-Weimar,

2011), S.244. 翻訳は執筆者。

³⁰ Hammerbacher, Franz: *Die Kolumne»Schattenspiele« - das Buch » Subtexte «* (in: Text + Kritik 175 Ilse Aichinger, 2007) S.99f. 翻訳は執筆者。

³¹ *Ibid.*, S.99.

³² Aichinger, Ilse: *Unglaubliche Reisen* (Frankfurt a.M. 2005)

³³ Aichinger (2005), S.44.

³⁴ *Ibid.*, S.76.

³⁵ *Ibid.*, S.95.

³⁶ Mooser (2006), S.75参照。

³⁷ Shindo, Sugi: *Stolpersteine*. (in: Ivanovic, Christine; Shindo, Sugi (Hrg.): *Absprung zur Weiterbesinnung*. Tübingen, 2011), S.76f.

ここには、小学生用のノートが使用されている例が掲載されている。

³⁸ Aichinger, Ilse: *Subtexte* (Wien 2006)

³⁹ *Die Dioskuren aus Gumpendorf*. in: Aichinger (2006), S.22-25.

⁴⁰ Aichinger (2006), S.25訳は執筆者。

⁴¹ *Landschaften und Wetterlagen der Existenz*. in: Aichinger (2006), S.13-16.

⁴² ハプスブルク帝国時代に作られた鉄道会社。ウィーンからポーランド方面に伸びる鉄道で、アウシュビッツもその沿線にある。

⁴³ *Ibid.*, S.15.

⁴⁴ *Ibid.*, S.14.

⁴⁵ *Ibid.*, S.15.

⁴⁶ *Ibid.*, S.16.

⁴⁷ 本来「きれい」はドイツ語でschön、しかし原文では、ポーランド人家政婦の口語をそのまま用いてscheenとしている。